

研究ノート

老年看護学実習における学生が行うアクティビティケアの学び ——「アクティビティケア計画用紙」と「アクティビティケア評価用紙」を用いた現状分析——

川久保悦子¹⁾・井本由希子²⁾・伊藤まゆみ²⁾

Activity Care Learning by Students in a Gerontological Nursing Practicum:

A Current Status Analysis using “Activity Care Planning Forms”
and “Activity Care Evaluation Forms”

Etsuko KAWAKUBO¹⁾・Yukiko IMOTO²⁾・Mayumi ITO²⁾

要 旨

【目 的】 老年看護学実習において「アクティビティケア計画用紙」と「アクティビティケア評価用紙」を用い、認知症高齢者を対象としたアクティビティケアを実施する学生の学びと教育効果を明らかにすることを目的とした。**【方 法】** A大学の老年看護学実習で、同意を得られた81名の学生を対象に、学生がチームごとに作成した「アクティビティケア計画用紙」と「アクティビティケア評価用紙」各38枚を分析対象とした。学生が実施したプログラムと認知症高齢者の反応は「アクティビティケア計画用紙」から抽出し集計した。「アクティビティケア評価用紙」の自由記述内容は意味内容により質的に分析した。アクティビティケアに関する学生の自己評価スケール（5件法）5項目は項目ごとに平均点を算出した。**【結 果】** 1. アクティビティケアプログラムに参加した認知症高齢者はのべ252人であった。プログラム内容は、貼り絵が最も多く、ぬり絵、ボーリング、魚釣り、野菜釣り、玉をねらうゲーム、工作などであった。認知症の進行度により参加者の反応は異なる傾向があった。2. 学生が認識したアクティビティケアの効果に関する自由記述内容の分析から、59コードが得られ、【アクティビティケアの効果】【認知症高齢者がアクティビティケアに参加できる要素】【学生としての自己課題】【認知症高齢者との関係形成】【認知症高齢者を尊重した看護の提供】の5カテゴリーに分類された。3. 学生の自己評価スケール5項目のうち平均点が高かったのは「学生は楽しみながらできた」で、低かったのは「プログラムが認知症高齢者の能力に合っていた」であった。**【考 察】** 学生は認知症高齢者の個性や価値観の違い、その人を尊重したケアを考察していた。効果的なアクティビティケア実践には、①事前に認知症高齢者の背景情報を得ること、②カンファレンスで記録用紙を用い客観的に振り返ることが必要である。今回使用した「アクティビティケア計画用紙」「アクティビティケア評価用紙」は学生の思考過程を整理し、学びを知るうえで有効であった。**【結 論】** 今後、学生の学びが深まるようなアクティビティケアを促進できる環境づくりと教員及び施設スタッフへの支援方法を検討していく必要がある。

キーワード：老年看護学実習、アクティビティケア、認知症高齢者、看護学生、記録用紙

1) 目白大学看護学部看護学科 2) 群馬パース大学保健科学部看護学科

I. はじめに

老年看護学において、アクティビティケアは高齢者の生活機能を整える看護としての意味を持ち、高齢者の心身の活動性を高める方法として位置づけられている¹⁾。しかし、老年看護学関連科目の講義または演習で単元として独立してアクティビティケア及びレクリエーションを教授している4年制看護基礎教育機関は3割、実習でアクティビティケア及びレクリエーションを企画運営しているのは2割と報告されており²⁾、アクティビティケアを実習に取り入れている看護系大学は少ない現状がある。

近年、高齢者施設ではアクティビティケアが盛んに実施されている。アクティビティケアは残存機能の維持、認知症進行の防止、仲間との交流の機会、豊かな生活の支援など、高齢者にいきいきとした生活をもたらす、QOLを向上させるケア方法であり、その有効性や効果は数多く報告されている³⁻⁴⁾。

認知症のBPSD (Behavioral and Psychological Symptoms of Dementia : 認知症の行動・心理症状) には、環境の調整を含めた適切な対応がケア提供者に求められており、不適切な対応は本人のQOLを低下させてしまう。その人らしさを尊重したケア提供者の関わり⁵⁾、生活や環境を整えることが必要となる。そこで、学生のうちから認知症高齢者と関わり、自分の行ったケアが、高齢者にどのような反応をもたらすか、振り返ることが求められている。

A大学の「老年看護学実習」の目的は、老年期にある対象者を総合的に理解し、保健・医療・福祉チームの一員として、既習の知識・技術を活用し、尊重する態度をもって、対象者に応じた看護を展開する能力を養うことである。具体的目標は、「認知症高齢者を対象とする介護施設の役割と概要を理解する」、「認知症高齢者と共に過ごし、高齢者の日常生活を知ることができる」、「スタッフのケア場面での観察をとおして認知症高齢者への関わり方やケアの特性について理解することができる」、「認知症高齢者に日常生活ケアを実施し、行ったケアを振り返ることができる」である。実習は病院(2週間)と高齢者施設(1週間)の両方で行っている。高齢者施設実習は、認知症対応型共同生活介護(グループホーム:以下、グループホーム)と小規模多機能居宅介護の2種類の施設で実施している。この施設実習で、学生が認知症高齢者を対象にアクティビティケアを実施している。

しかし、学生は詳細な計画や振り返りをしないままアクティビティケアを実施していた。つまり、対象となる高齢者の身体的、心理的、社会的、スピリチュアル的側面や高齢者を取り巻く生活環境などの背景を考えながら、その効果を考察するまでには至っていない現状があった。

看護学実習で、患者と関わる場面ひとつひとつには意味があり、その場面を分析し内容を深める必要性があること⁶⁾や、臨床行為や臨床課題に関してフィードバックを行うことが重要な教授要素である⁷⁾。これらを踏まえ、実習でのアクティビティケアにおいても、認知症高齢者との関わりを丁寧に捉え、その内容を分析するような学習が必要であると考えた。

そこで今回、学生の思考を効果的に促すよう、新たに作成した実習記録用紙「アクティビティケア計画用紙」(資料1)と「アクティビティケア評価用紙」(資料2)の2種類を用いて、アクティビティケアを実施した学生の学びと、アクティビティケア実施における教育効果を検討した。

II. 研究目的

老年看護学実習の高齢者施設実習において、「アクティビティケア計画用紙」と「アクティビティケア評価用紙」を用いて、認知症高齢者を対象としたアクティビティケアを行う学生の学びと教育効果を明らかにすることである。

III. 研究方法

1. 研究対象

A大学の3年次に行う老年看護学実習における高齢者施設実習の履修者で、本研究の意義、目的、方法、公表方法、倫理的配慮の説明を受け、研究協力に同意した81名の学生である。学生がグループごとに作成した「アクティビティケア計画用紙」と「アクティビティケア評価用紙」各38枚を分析対象とした。

2. 研究期間

2012年10月16日～2013年1月23日に実施した。

3. 「アクティビティケア計画用紙」「アクティビティケア評価用紙」について(資料1・2)

「アクティビティケア計画用紙」に記載する内容は、

アクティビティケアのタイトル、内容、目的、計画立案上の理由・重要点、学生とスタッフが用意する物、配置図、時間の流れ、アクティビティケア時の注意事項である。

「アクティビティケア評価用紙」は、「認知症高齢者の状態」と「アクティビティケア評価表」で構成されている。「認知症高齢者の状態」は、年齢、性別、日常生活自立度、認知症日常生活自立度（認知症のレベル）、介護度、車椅子使用・麻痺の程度、言語・聴力障害、参加の様子（1. 没頭している、2. 表面的な参加、3. 他人を眺め道具をとらない、4. 回避・参加せず）である。認知症高齢者の状態は、ケアスタッフの許可を得て介護一覧表より転記した。「アクティビティケア評価表」の評価項目は、石川らが使用している『高齢者看護学実習アクティビティケア評価表』⁸⁾の10項目を検討し、その中から「安全性」「能力」「目的達成」「楽しむこと」の4項目を選択した。また認知症高齢者の様子、学生のアクティビティケアに関する記述項目を加え構成した。その評価項目は、「認知症高齢者の能力にプログラムが合っていたか、理解していたか」「安全であったか」「プログラムで目的を達成できたか」「認知症高齢者は楽しんでいたか」「学生は楽しみながらできたか」であり、5件法による評価と自由記載欄を設けた。「認知症高齢者の介入中の様子」「認知症高齢者の介入後の様子」「学生が必要と考えること」「学生が認識する効果」は自由記載とした。

4. データ収集の方法

「アクティビティケア評価用紙」「アクティビティケア計画用紙」は施設の各ユニットに配置されたグループに対して1枚配布し、グループメンバーの討議の上、記入してもらった。学生はユニットのグループ単位で使用する1つの記録用紙に、グループで討議しながら記入した。「アクティビティケア計画用紙」「アクティビティケア評価用紙」は実習評価から除くため、実習前のオリエンテーション時に、成績に関与しないこと、提出は任意であり、グループメンバーの同意が得られた場合のみ提出する旨を学生に伝えた。提出方法は、実習記録の提出時に成績評価対象の記録とは別のボックスに入れるように説明した。全員の老年看護学実習が終了し、成績評価を行った後に収集ボックスから取り出し、研究対象とした。

5. 分析方法

学生が認識した学びとして、アクティビティ評価表小項目のうち、「10. 認知症高齢者に対して行うアクティビティケアに困難を感じていること、また必要なことは何であるか」「11. 認知症高齢者に対してアクティビティケアを行い、学生が認識する効果」「12. アクティビティケア後の感想」の3小項目の記述内容を分析した。分析は、舟島⁹⁾の内容分析の手法を参考に行った。まず、小項目10から12について、学生の記述内容を繰り返し読み、文脈の前後の意味を壊さないように、1文脈1記録単位として抽出した。文章に複数の記録単位が記述されている場合は分割し、複数の記録単位とした。記述に重複した表現がある場合、1つの記録単位とした。次に、得られた記録単位を意味内容の類似したものを集めてコードを作成した。コードの相違性、共通性を検討し、サブカテゴリ化した。サブカテゴリの意味の類似したものをさらに分類し、カテゴリ名をつけた。記録単位数からカテゴリごとに割合を算出した。また、学生の自己評価5項目「全体として認知症高齢者の能力にプログラムが合っていたか、理解していたか」「安全であったか」「プログラムで目的を達成できたか」「全体として認知症高齢者は楽しんでいたか」「全体として学生は楽しみながらできたか」について5件法の評価スケールの平均点を算出した。

学生が行うアクティビティケアの対象者は、「アクティビティケア評価用紙」から抽出し、学生が行ったアクティビティケアプログラムと認知症高齢者の反応は、「アクティビティケア計画用紙」の記載事項より抽出し集計した。

6. 用語の定義

本研究で用いるアクティビティケアとは、高齢者施設の利用者に対して行われる、体操、機能訓練、ゲーム、レクリエーションと呼ばれるさまざまな活動プログラムであり、認知症高齢者が楽しみながら参加し、他の利用者との交流で生活全体を活性化させるための諸活動とした。

7. 高齢者施設実習の概要（表1）

実習学生の配置、5日間の実習スケジュールと実習の具体的な進め方について概要を表に示した。

表1 高齢者施設実習の概要

学生配置と指導体制			
学 生 配 置	グループホームは1ユニットあたり学生2～3名、小規模多機能居宅介護は学生3名		
指 導 体 制	施設ごとに教員1名、ユニットごとにケアスタッフ1～2名		
実習日程と内容、アクティビティケアのすすめ方			
日程	場所	実習の全般的な内容	アクティビティケア
1日目	学内	<ul style="list-style-type: none"> ・オリエンテーション ・事前学習内容の確認 ・認知症関連DVD視聴（①グループホーム施設概要、②認知症者とのコミュニケーションの取り方） 	<ul style="list-style-type: none"> ・参考図書、資料の閲覧、貸し出し ・使用可能物品の確認、準備
2日目	施設	<ul style="list-style-type: none"> ・施設オリエンテーション ・ケアスタッフによる個別ケア・全体ケアの見学 ・高齢者とのコミュニケーション ・高齢者とともに昼食 ・ケアスタッフとともに行動 ・カンファレンス 	<ul style="list-style-type: none"> ・ケアスタッフによるアクティビティケアの見学 ・高齢者の身体的背景や認知症の状態を情報収集 ・「アクティビティケア計画用紙」に計画を記入 ・指導者から内容、安全性について指導を受ける ・実習終了後、アクティビティケア物品等の準備
3日目	施設	<ul style="list-style-type: none"> ・ケアスタッフによる個別ケア・全体ケアの見学 ・ケアスタッフとともに行動 ・学生が可能なケアの実施 ・高齢者とのコミュニケーション ・高齢者とともに昼食 ・カンファレンス 	<ul style="list-style-type: none"> ・「アクティビティケア計画用紙」の修正内容の確認 ・計画にそってアクティビティケアの実施 ・「アクティビティケア評価用紙」に実施後の評価をグループで討議しながら記入 ・カンファレンスで発表し、指導者、教員と討議
4日目	学内	<ul style="list-style-type: none"> ・実習課題の自己学習 ・実習レポートの作成 	<ul style="list-style-type: none"> ・カンファレンスでの討議、指導をもとに「アクティビティケア評価用紙」の修正
5日目	学内	<ul style="list-style-type: none"> ・プロセスレコードの発表と討議 ・実習課題レポートの発表と討議 ・施設提出レポートの作成 	<ul style="list-style-type: none"> ・実習終了後、「アクティビティケア計画用紙」「アクティビティケア評価用紙」を提出

8. 倫理的配慮

実習前のオリエンテーション時に、研究目的と方法について口頭および文書で以下の内容を学生に説明し、学生のユニットごとのグループ全員の書面による同意が得られた場合を、研究参加の同意とし、記録用紙の提出をもって研究対象とした。参加の自由意思の尊重と拒否ができること、研究の参加の有無により成績評価が左右されないこと、「アクティビティケア計画用紙」、「アクティビティケア評価用紙」は老年看護学実習の成績評価の対象とならないこと、「アクティビティケア計画用紙」「アクティビティケア評価用紙」は氏名、学籍番号の記載がないこと、「アクティビティケア計画用紙」「アクティビティケア評価用紙」は鍵のかかるボックスに保管し、実習評価をつけた後に研究の対象とすること、記録物のデータは研究以外に使用しないこと、研究結果のデータは匿名化し、個人のプライバシーの保護をすること、研究結果は学会等学術目的での発表がされることの説明を行った。アクティビティケアを受ける認知症高齢者に対しても、高齢者の

代諾者等に口頭と文書による説明を行った。本研究は群馬パース大学倫理審査部会（臨床倫理審査）の承認を受けてから実施した。（承認番号 PAZ12-17）

IV. 結 果

1. 対象

研究協力が得られた学生は81名中81名（100%）であった。アクティビティケア計画用紙38枚（回収率100%）、アクティビティケア評価用紙38枚（回収率100%）が得られ、分析対象とした。

2. 学生が行うアクティビティケアの対象者

グループホーム入所者と小規模多機能施設を利用する認知症高齢者は両施設合わせて67人であった。内訳は男性22人、女性45人、前期高齢者（65～74歳）6人、後期高齢者（75歳以上）61人、日常生活自立度はA 1が最も多く24人（36%）、認知症日常生活自立度はⅡが最も多く28人（42%）、介護度の平均は2.8であった。

車椅子利用・麻痺ありは33人（49%）、言語・聴覚障害は18人（27%）であった。学生のアクティビティケアプログラムに参加した高齢者はのべ252人であった。

3. 学生の自己評価

学生の自己評価の各項目における5段階スケールの平均点は以下のとおりであった。平均点が最も高かったのは「全体として学生は楽しみながらできたか」（4.68）、「安全であったか」（4.53）、「プログラムで目的を達成できたか」（4.51）、「全体として認知症高齢者は楽しんでいたか」（4.37）、「全体としてプログラムが認知症高齢者の能力に合っていたか、理解していたか」（3.84）であった。

4. アクティビティケアプログラムと認知症高齢者の反応（表2）

学生が行ったプログラム内容は、貼り絵8回、ぬり絵3回、ボーリング5回、魚釣り、野菜釣り5回、玉をねらうもの（ボードゲーム・玉入れ・シューティングゲーム）3回、工作（破魔矢づくり、カレンダーづくり、パズル、ツリー、おひな様）5回、などの内容が多かった。

グループホーム内のユニット1のアクティビティケア参加者は、重度認知症者であり、風船バレー、魚釣りで活気を出した。ユニット2のアクティビティケア参加者は、重度認知症者が多く、軽度認知症者は入居者9人中2人であった。貼り絵、魚釣りはどのレベル

表2 アクティビティケアプログラムと認知症高齢者の反応

(人)

年月	場所	プログラム内容	学 生 の 人 数	参加した高齢者の人数			1. 没 頭 し て い る	2. 表 面 的 な 参 加	3. 他 人 を 眺 め 、 道 具 を と ら ない	4. 回 避 ・ 参 加 せ ず	学生の考えたこと（抜粋）	
				軽 度 認 知 症 I	中 等 度 認 知 症 II	重 度 認 知 症 III						
10月17日	ユニット1	色塗りにして切ってパズルをつくる	2	3	0	2	1	2	0	1	2（重度認知症）	高齢者は会話しながら楽しんだが、パズルが難しすぎた
11月7日		ぬり絵をして、魚釣り	2	6	0	1	5	3	1	2	0	活気がない人が活気がでた楽しかったと発語あった
12月12日		もみじの貼り絵	2	5	0	0	5	2	1	2	1（重度認知症）	高齢者の能力をみて、役割分担していくと楽しんでくださる
1月9日		風船バレー	2	4	0	1	3	3	1	0	1（重度認知症）	説明が要らない簡単なもの、からだを動かす活き活きとした
1月17日		鬼のお面づくり	2	3	0	1	2	0	2	1	3（重度認知症） 1（軽度認知症）	自分ではできないと決めつけている人が多い。促すことが必要である
1月22日		ひな祭りのぬり絵	2	5	0	0	5	1	2	2	1（重度認知症）	1つの大きな紙に貼る時その人に合った作業をするように促す。笑顔がみられた
10月17日	ユニット2	折り紙の貼り絵	2	7	2	1	4	4	2	1	2（重度認知症）	一緒に行うことで気分転換になった。作品が残るので思いでになった
11月7日		ちぎり絵の貼り絵	2	8	2	1	5	3	2	2	1（重度認知症）	貼り絵はどの高齢者にも好評であった。自己効力感を感じると思う
12月12日		ツリー作り・メロディ演奏	2	8	2	1	5	2	6	0	0	ツリーの飾り付けが楽しかった。音楽好きな方も多く演奏も楽しんでた
1月9日		福笑い・お手玉	2	8	2	2	4	4	1	3	1（重度）	高齢者の理解度や認知度を理解できた。全員が輪になってできてよかった
1月17日		野菜と魚釣り	2	7	2	0	5	4	2	1	1（重度認知症） 1（中等度認知症）	「今までで一番楽しかった」と言っていた。交流が増えた
1月22日		ボーリング	2	8	2	1	5	5	2	1	0	盛り上げていくことが大切である。活発な姿がみられた
10月17日	ユニット3	折り紙を模造紙にはりつける	2	6	1	3	2	3	1	2	0	秋の画題で季節にふれることができた
11月7日		ちぎり絵の貼り絵	2	4	0	3	1	2	2	0	0	「できないよ」という発言が聞かれたが楽しんでくれた
12月12日		玉入れ	2	8	1	5	2	4	3	1	1（重度認知症）	とても盛り上がった。高齢者同士の口論の仲裁をした
1月9日		福笑い・魚釣り	2	5	1	4	0	3	0	2	3（重度） 1（軽度）	楽しかったと言われた。能力の差を援助する必要があった
1月17日		鬼のお面作り・ボーリング	2	6	1	4	1	3	2	0	1（中等度） 2（重度）	お面作りのほうが自己表現ができて効果があったと思う。ボーリングはすぐに飽きてしまった
1月22日		風船バレー・貼り絵	2	4	0	2	2	1	3	0	1（軽度認知症） 2（中等度認知症） 2（重度）	発語の少ない人も介入で話をしてくれた
10月17日	ユニット4	すごろく	2	6	1	1	4	2	2	2	1（重度認知症）	認知症のレベルにより参加できる人とできない人に分かれた
11月7日		ぬり絵、風船バレー	2	4	0	2	2	2	1	1	2（中等度認知症） 2（重度認知症）	ぬり絵は2名のみ参加し真剣にとりこんでいた。バレーは身体を動かしていた
12月12日		クリスマスツリーのフェルトの貼り絵	1	6	0	2	4	4	1	1	2（重度認知症）	普段動かない人も興味を持って作った
1月9日		野菜釣り	2	6	0	2	4	3	1	2	1（重度） 1（中等度）	高齢者のコミュニケーションになった。賞品を大切にしてくれた
1月17日		箱にボールを当て倒し	2	6	0	3	3	4	1	1	2（重度） 1（中度）	体を動かす機会となった。笑顔が多くみられた
1月22日		ボーリング	2	7	0	2	5	6	1	0	1（中等度認知症） 2（重度認知症）	高齢者と一緒に、場所の共有が楽しかった

年月	場所	プログラム内容	学 生 の 人 数	参 加 し た 高 齢 者 の 人 数	認知症高齢者の 日常生活自立度 (認知症レベル)			1. 没 頭 し て い る	2. 表 面 的 な 参 加	3. 他 人 を 眺 め、 道 を と ら な い	4. 回 避 ・ 参 加 せ ず	学生の考えたこと (抜粋)
					軽 度 認 知 症 I	中 等 度 認 知 症 II	重 度 認 知 症 III					
10月17日	ユニット5	紙コップのポーリング	2	8	1	6	1	5	3	0	0	いかに盛り上げるかが難しい
11月7日		風船バレー・かるたとりを追加	2	8	1	6	1	7	1	0	1 軽度認知症(全盲)	活気がでた、普段みられない一面を見た
12月12日		ボードゲーム	2	8	1	6	1	3	5	0	0	高齢者の活気づけになった
1月9日		書き初め	2	6	0	5	1	4	0	2	2 軽度認知症:うち1全盲 1 中等度認知症	ペースを大切に無理に参加しないように促すことが大切である
1月17日		野菜釣り	2	7	1	5	1	2	3	2	1 軽度認知症(全盲) 1 中等度認知症	夢中になって脳に刺激がいったと考える
1月22日		シューティングゲーム	2	7	1	5	1	6	1	0	2 軽度認知症:うち1全盲	ひとり1人のやる気がでていた。活動性の低いと思っていた人が皆と同じように実施できていた
10月17日	ユニット6	歌・福笑い・貼り絵	3	8	0	5	3	2	3	3	1 (重度認知症)	楽しかった。個々で作品を作るのではなく皆で1つの作品をつくるとよかった
11月7日		座ってできるテーブルポーリング	2	7	0	5	2	5	1	1	2 (重度認知症)	最初プログラム案を悩んだが皆が笑顔になれてよかった
12月18日		破魔矢づくり	2	7	0	5	2	5	1	1	1 (重度認知症)	出し物がよかった。皆が同じものを作れてそれぞれが達成感を感じた
1月24日		カレンダーづくり	3	6	0	5	1	5	1	0	2 (重度認知症)	拒否をする人がいたが、声をかけて見守った。普段やらないことで気分転換になる
10月17日	小規模多機能居宅介護ユニット	箱に玉を当てる・歌	3	9	1	6	2	7	2	0	0	学生が楽しく行った。景品を得ることで利用者は満足感を得ると思う
11月7日		クリスマスの折り紙	3	10	1	6	3	8	0	2	1 (重度認知症)	季節を感じることで、楽しんだ。笑顔があった
12月18日		ピンポン玉リレー・歌	3	11	1	8	2	8	1	2	1 (重度認知症)	自分も楽しんだうえで関わる。十分な準備が必要だと思ふ
1月24日		紙コップのおひな様づくり	3	10	1	7	2	7	3	0	0	季節感をとり入れたものがよい。分かりやすいものを完成させることで達成感を感じてもらった
計			81	252								

※ 〇は参加者毎の最も多い認知レベル

の入居者でも好評であった。ユニット3のアクティビティケア参加者は、ユニットの約半数が中等度認知症者であり、中等度認知症者は玉入れ、福笑いのほかに鬼のお面づくりに没頭した。ユニット4のアクティビティケア参加者は重度認知症者が多く、ポーリングで楽しむことができた。ユニット5は中等度認知症者が多く、シューティングゲームや風船バレー、かるたとりなど他人と競って行うものに没頭した。書初めも集中して行っていた。ユニット6は約半数が中等度認知症者であり、ポーリングや破魔矢づくり、カレンダーづくりなど皆と同じ物を作ることで満足感を得ていた。しかし、重度認知症者はアクティビティの場にいたが、参加はしなかった。

小規模多機能居宅介護施設では中等度認知症者が多く、ピンポン玉リレー、歌、季節感を取り入れた工作で楽しんでいる様子であった。

5. 認知症高齢者へのアクティビティケアで学生が認識した学び (表3)

アクティビティケア後の評価用紙の項目「10. 認知症高齢者に対して行うアクティビティケアに困難に感じていること、また必要なことは何であるか」[11.

認知症高齢者に対してアクティビティケアを行い、学生が認識する効果」[12. アクティビティケア後の感想]の記載について、質的分析の結果、59コードが得られた(表3)。以下サブカテゴリを【 】、カテゴリを《 》で記す。

認知症高齢者へのアクティビティケアで学生が認識した学びは、《アクティビティケアの効果》、《認知症高齢者がアクティビティケアに参加できる要素》、《学生としての自己課題》、《認知症高齢者との関係形成》、《認知症高齢者を尊重した看護の提供》の5カテゴリに分類された。

カテゴリ《アクティビティケアの効果》は記録単位が最も多く、全体の34.2%を占め【認知症高齢者の心理面の変化の認識】、【プログラムの有用性の確認】の2つのサブカテゴリが抽出された。次いで《認知症高齢者がアクティビティに参加できる要素》は31.5%であり、【学生のプログラム選択と提供の調整】、【認知症を持つ人に対するケアの気遣い】、【認知症高齢者への参加環境の調整】、【安全安楽の確保】の4サブカテゴリが抽出された。《学生としての自己課題》は18.8%であり、【学生の心配】、【認知症疾患に関する知識の確認】、【学生が考える認知症ケアに対する思考

表3 認知症高齢者へのアクティビティケアで学生が認識した学び

n=149

カテゴリ (記録単位数, %)	サブカテゴリ	コード	記録単位	
認知症高齢者を尊重した看護の提供 (10, 6.7%)	学生による参加の促進	認知症高齢者に参加したくなるような声掛けをする	2	
		認知症高齢者に無理に参加を促すのではなく、まず様子をみてもらう	1	
		認知症高齢者個々の能力を把握する	2	
	認知症高齢者の自己効力感の尊重	学生が認知症高齢者の自己効力感や達成感自身を持てるよう、支える	3	
		学生が認知症高齢者にできることを促す	1	
	認知症高齢者のニーズの尊重	学生は認知症高齢者によってやりたいことが違うことを知る	1	
認知症高齢者がアクティビティケアに参加できる要素 (47, 31.5%)	学生のプログラム選択と提供の調整	すべての認知症高齢者が楽しめる内容にする	7	
		認知症レベルに合う内容にする	4	
		プログラムの選択について十分な準備をする	2	
		認知症高齢者が飽きてしまわない内容にする	2	
		認知症高齢者に説明しなくても簡単にできる内容にする	1	
	認知症を持つ人に対するケアの気遣い	認知症高齢者の作業のペースに合わせる	6	
		学生は認知症高齢者の手を取り一緒にを行い、完成までつきあう	6	
		認知レベルの低い人へゆっくり繰り返し説明する	4	
		認知症高齢者に手本を見せるようにする	4	
		意欲のわくような声かけをする	3	
	認知症高齢者への参加環境の調整	認知症高齢者の理解しやすい言葉で説明する	1	
		難聴の席に配慮する	1	
		認知症高齢者と交流できるような配置をする	1	
	安全安楽の確保	認知症高齢者の口論の仲裁にはいる	1	
		学生は周囲の環境を整え危険の回避をする	2	
		学生は安全なプログラムを計画する	1	
	アクティビティケアの効果 (51, 34.2%)	認知症高齢者の心身面の変化の確認	学生は認知症高齢者の身体状態に合わせた危険の回避をする	1
			認知症高齢者同士の会話が増える	12
			認知症高齢者に活気がでる	7
			認知症高齢者が笑顔になる、明るくなる	8
			認知症高齢者に普段みられない一面がでる	6
認知症高齢者が気分転換できる			3	
認知症高齢者の運動につながる			2	
認知症高齢者が「楽しい」という			2	
認知症高齢者が活動的となり体が温まる		1		
プログラムの有効性の確認		認知症高齢者が季節感を感じる内容にする	3	
		認知症高齢者の作った作品が思い出となる	2	
		認知症高齢者が非日常のこゝろを行くことで、楽しんでくれる	2	
		認知症高齢者の創意工夫を知る	1	
		認知症高齢者に景色をさしあげることで喜んでくれる	1	
	認知症高齢者がより自分らしさを表現できるプログラムがわかる	1		
学生としての自己課題 (28, 18.8%)	学生の心配	学生は最初は不安を感じる	2	
		学生は最初は方法が不慣れである	2	
	認知症疾患に関する知識の確認	学生は認知症高齢者個々に遂行能力の差があることを知る	3	
		学生は認知症高齢者のADLを維持できると考える	2	
		学生は認知症高齢者のQOLが向上すると考える	1	
		学生は認知症高齢者の脳が活性化されると考える	1	
	学生が考える認知症ケアに対する思考の促進	認知症高齢者は失敗することを恐れることを知る	2	
		認知症高齢者が集中すると刺激となると考える	1	
		認知症高齢者が感情表現が豊かとなり、それが認知機能の向上につながることを知る	1	
		認知症高齢者のできないという発言が多いことを知る	1	
		介入で認知症高齢者とコミュニケーションをとりやすくなることを知る	1	
		介入で認知症高齢者個々の理解度を知る	1	
		認知症高齢者が活動したいことが多様であることを知る	1	
学生による介入の難しさ	介入により認知症の関わり方がわかる	1		
	拒否される人への関わりに戸惑う	4		
	身体機能の障害のある人の支援が難しい	2		
	計画の盛り上げ方が難しい	1		
認知症高齢者との関係形成 (13, 8.7%)	認知症高齢者とのパートナーシップ	認知レベルの差を考慮して介入することが難しい	1	
		学生は認知症高齢者と時間を共有し楽しく感じる	8	
	認知症高齢者との信頼関係の成立	学生は認知症高齢者を見守り、支える	1	
		学生は認知症高齢者からの言動でやりがいを感じる	3	
		学生は認知症高齢者の笑顔でほっとする	1	

の促進】、【学生による介入の難しさ】の4つのサブカテゴリが抽出された。《認知症高齢者との関係形成》は8.7%であり、【認知症高齢者とのパートナーシップ】、【認知症高齢者との信頼関係の成立】、の2つのサブカテゴリが抽出された。《認知症高齢者を尊重した看護の提供》は6.7%であり【学生による参加の促進】、【認知症高齢者の自己効力感の尊重】、【認知症高齢者のニーズの尊重】の3つのサブカテゴリが抽出された。

V. 考 察

1. アクティビティケアを実施し、学生が認識した学びについて

《アクティビティケアの効果》

実習記録内容の分析から、認知症高齢者にアクティビティケアを行って、最も学生が学んだことは、アクティビティケアの効果の34.2%と記録数の約3割をしめた。学生は認知症高齢者の心身面の変化として、笑顔やコミュニケーションの向上、活気や意欲の向上、脳活性化を報告しており、効果を実感していたと考える。アクティビティケアプログラムの有効性の確認では、書初めや鬼のお面づくりなどの季節感や非日常性を取り入れたプログラムは、見当識障害に対して有効であった。また、箱に玉を当てるゲームで皆に賞品を用意したことで楽しめるような場になったと考察していた。一様に楽しめることは、「生活の快さ」の演出であり、認知症に対するアクティビティケアを成功に導くポイント¹⁰⁾と一致していた。ぬり絵の絵は懐かしの風景であり、それらは「楽しかった思い出の回想につながる」¹¹⁾ということも学生は考察していた。そのように、学生は認知症高齢者の生活歴まで考えるようになり、認知症ケアの基本となる、その人らしさの尊重に気づいた学生は、認知症高齢者の活気や意欲の向上の効果のみならず、彼らの生活を尊重するということも学ぶことができたと考えた。

《認知症高齢者がアクティビティケアに参加できる要素》

学生の自己目標のスケールの平均点で最も低いのは「全体として認知症高齢者の能力にプログラムが合っていたか、理解していたか」であった。プログラム立案時に身体的・認知機能レベルの情報は得ていたが、「認知症レベルに合わせる内容にする」工夫が足りていなかった。とくに重度認知症者の多いフロアでは、実施後に、学生は「ぬり絵ができる人は少なかった」

と気づいた。学生は認知症者の遂行能力の低さをあらかじめ予想できず、実体験が乏しいため、実施後に、プログラムが能力に合っていないことに気づいたと考えられる。一方、「ボーリングは、軽度認知症者はすぐに飽きてしまい、お面づくりのほうが、自己表現ができて効果があった」と記述していた。軽度認知症者にとって簡単なものは達成感をもたらさないことにも気づいていた。

アクティビティケアは「すべての人に受け入れられる内容」をめざすのではなく、「できない人でも個別的に支え、補っていき、そして参加の喜びを味わっていただく」、QOLに貢献する支援である¹²⁾と言われている。しかし学生は、すべての人が満足できるプログラム内容を第一目標としていた。このことから、学生は、アクティビティケアは参加者全体に焦点を当てた関わりと、個別性に焦点を当てた関わりの両者が求められるという考察に至る、前段階にいると推察できる。

《学生としての自己課題》

【学生が考える認知症ケアに対する思考の促進】について、認知症をもつ高齢者とのコミュニケーションや援助は多くの学生が困難と感じていた。学生は核家族世代が多く、認知症高齢者の対応経験の不足があると考えられる。しかし、学生は最初認知症高齢者の関わり方に不安をもつが、アクティビティケアを実施して、個別に関わることで、認知症の程度による能力差や、興味をもつものがさまざまであることに気づくことができた。

学生は、「参加を拒否する人への対応」にも戸惑っていた。しかし、参加の拒否も「その人の思いを尊重すること」と考えており、「いつでも、どこでも、その人らしく」暮らすという認知症ケアの基本理念¹³⁾を認識していたと考えられる。

《認知症高齢者との関係形成》

学生は「認知症高齢者と時間を共有して楽しかった。やりがいを感じた」と報告していた。学生は、高齢者がやりたいことを尊重し、残存能力を引き出すような関わりや達成感を得られるような支援方法をしていた。認知症の人へのコミュニケーションは「言葉が通じない」ことが「コミュニケーションできないこと」と同義とされている¹⁴⁾。学生は、丁寧に傾聴し、認知症の人が求めている真のニーズを引き出し、心を合わせてアクティビティケアに関わっていたと考える。

《認知症高齢者を尊重した看護の提供》

学生は、認知症高齢者へのアクティビティケア参加の促しができたことで、認知症高齢者の意思を尊重し、ニーズにあったケアを展開していたと推測される。

以上のことから、学生は、アクティビティケア実施をととして意識的に認知症高齢者と関わり、多くの学びを得たと考える。

2. アクティビティケアの実践に求めるもの

高齢者施設における看護師は医療の必要性が低くなるにしたがって、在宅復帰に向けて高齢者の可能性を引き出し、その人らしい生活の実現に向けたADLやQOLの向上のために、他職種や家族と連携しながらその実現に向けて働きかけていく役割が求められる¹⁵⁾。とくに急性期の看護学実習では、医学モデル・治療モデルが中心となっており、在院日数の短縮や医療の高度化に伴い学生は患者の生活や背景をじっくりと考えるような働きかけがなされていないことが多い。しかし、老年看護学実習でめざすところは、学生は高齢者の生活、生命、人生を包括的に見る視点を養うことである。その点を考えると背景や生活をじっくりと考えながら、アクティビティケアを達成することにより、学生が主体的に看護を行ったという実感を得られるのではないかと考えられる。また横山は、アクティビティケアを用いた実習のプログラムは学生が受け持ち患者の看護過程展開のみでは見えにくい高齢者の集団的な特性を理解して、個別的に支援する看護実践能力を促進することに寄与すると述べている¹⁶⁾。つまり、アクティビティケアを学生は一時的なイベントではなく、「集団を見ながら、個を見る看護実践」として捉えたのではないかと推察される。

老年看護学実習のアクティビティケアに「アクティビティケア計画用紙」「アクティビティケア評価用紙」を用いた教育効果として、第1に、記載されている認知レベルと実際の状態を照らし合わせたことで、実施可能なアクティビティケアの種類を選択ができ、認知症者への声かけができたことがある。事前に背景を知り得たことで、拒否する人への関わり方などを身体、心理、社会的側面から包括的に考察できたと考える。学生の約3割は認知症高齢者がアクティビティケアに参加できるような要素を整えることが重要であると記述していた。施設の協力を得てアクティビティケア参加者の情報を得ることが効果的な学習につながると考える。

また、重度認知症者であっても、できるADLや、できるコミュニケーションがあることを知り、介護記録上のADL評価と実際の差に気づくことができた。学生は、可能性を引き出すケアや生活に着目しており、認知症ケアにおける生活を視点とした看護を考えるきっかけとなったと推察される。

第2に、カンファレンスで評価用紙を用い、振り返り項目を客観的に振り返ることによる教育効果がある。振り返り項目の設定により、学生の認知症高齢者を観る視点が定まり、学生の思考過程を整理できると考える。岩永¹⁷⁾は、学生のもつ文脈を理解し、さらに新しい体系の存在を知らせることが必要であり、カンファレンスにおいて参加の様子を想起しながらケアに対する反応を文章化することは、深い考察につながると述べている。このように、アクティビティケアの効果を文章化し、考察する姿勢が重要であると考えられる。

黒白²⁾は老年看護学実習で学生によるアクティビティケアが多く取り入れられていない理由として、実習場や実習時間の制約と、看護におけるアクティビティケアの体系化が不十分であるためと述べている。実際には、実施時の安全面の配慮からも多くのスタッフの協力が必要となるため、実習施設のアクティビティケアの受け入れが鍵となる。また老年看護学領域では病院と高齢者施設の両方で実習を行っており、老年看護学教員は個別的なケアを考える病院のケアとグループダイナミクスを活かした高齢者施設でのケアに対応できる柔軟さが必要となると推察される。アクティビティケアへの知識や専門的に学生に指導する方法も必要になると考える。今後はアクティビティケア学習を促進できる環境と教員・スタッフへの支援方法を整える必要がある。

VI. お わ り に

本研究をとおし、次の3点の結論を得た。

1. アクティビティケアにおける学生の学びとして、《アクティビティケアの効果》、《認知症高齢者がアクティビティケアに参加できる要素》、《学生としての自己課題》、《認知症高齢者との関係形成》、《認知症高齢者を尊重した看護の提供》の5つのカテゴリーに分類できた。
2. 学生は、認知症高齢者のニーズや可能性を引き出しながら解決法を考える過程をたどっていた。学生は軽度認知症から重度認知症の高齢者に対して集団

を見ながら個を観ることを学んでいた。さらに、認知症高齢者の個別性や価値観の違い、その人を尊重した関わりを考察していた。

3. このことから、効果的なアクティビティケア実践には、①事前に認知症高齢者の背景情報を得ること、②カンファレンスで記録用紙を用い客観的に振り返ること、が必要である。今回使用した「アクティビティケア計画用紙」「アクティビティケア評価用紙」は学生の思考過程を整理し、学びを知るうえで有効であった。

以上をふまえ、今後、学生の学びが深まるようなアクティビティケアを促進できる環境づくりと教員及び施設スタッフへの支援方法を検討していく。

謝 辞

本研究を行うにあたりご協力いただきました皆様には、心より感謝申し上げます。なお、本研究は、平成24年度群馬パース大学特定研究費助成を受け実施し、日本老年看護学会第19回学術集会で発表した内容を加筆修正し、論文としてまとめたものである。本論文内容に関連する利益相反事項はない。

引用文献

- 1) 北川公子, 井出 訓, 植田 恵, 他. 系統別看護学講座専門分野Ⅱ老年看護学. 第8版, 東京, 医学書院, 2017, 427p., ISBN978-4-260-01815-9.
- 2) 黒白恵子. 老年看護学におけるアクティビティケアの教育状況と教員の認識. 目白大学健康科学研究. 2013. no.6, p.51-56.
- 3) 堤 雅恵, 留畑寿美江, 野垣 宏, 他. 超高齢の認知症事例の背景を生かしたアクティビティケアの効果 お茶会の実施による排尿と睡眠・覚醒パターンの変化. 認知症ケア事例ジャーナル. vol.5, 2012, no.3, p.238-246.
- 4) 六角僚子. アクティビティという視点をもつケアの有効性—痴呆高齢者ケアの視点から—. 老年看護学. 2001, vol.16, no. 1, P.114-122.
- 5) Kitwood TM (高橋誠一訳). 認知症のパーソンセンタードケア—新しいケアの分化へ—. 東京, 筒井書房, 2005, 5-15p., ISBN10-4-887-20483-3.
- 6) 上田雅代子, 竹村節子. 周手術期成人看護臨地実習における学生の学び—実習記録と学生自己評価からの分析—. 和歌山県立医科大学看護短期大学部紀要. 2005, no.6, p.41-52.
- 7) Diane, M.B., Judith, A.H. (奥宮暁子, 小林美子, 佐々木順子訳) 看護を教授すること. 原著第4版, 東京, 医歯薬出版株式会社, 2014, p.235-261., ISBN978-4-263-23590-4.
- 8) 石川幸代, 稲垣絹代, 永田美和子. 高齢者看護実習でアクティビティケア実施後の学生の自己評価の分析. 日本看護学会論文集 老年看護. No.41, 2011, p.46-49.
- 9) 舟島なをみ. 質的研究への挑戦. 第2版, 東京, 医学書院, 2007, p.48-79., ISBN978-4-260-00430-5.
- 10) 廣池利邦. アクティビティ・サービスを成功に導くためのポイント. 高齢者ケア. 2002, Vol.6, No.4, p.7-11.
- 11) 田中宏明, 芳賀大輔, 高畑進一, 他. 「思い出塗り絵」が軽度認知症患者の認知機能, 心理機能, 及び日常生活面に与える効果. 2009, Journal of Rehabilitation and Health Sciences, No.7, p.39-42.
- 12) 服部紀子, 安藤巴恵, 青木律子. 加齢・障害疑似体験を活用したアクティビティ企画運営演習の学習効果. Journal of Japan academy of gerontological nursing. 2009, Vol.13, No.2, p.87-96.
- 13) 山口晴保編. 認知症の正しい理解と包括的医療・ケアのポイント. 第2版, 東京, 協同医書出版社, 2014. p.59., ISBN973-4-763-960276.
- 14) 吉川悠貴. 認知症の人とのコミュニケーション技法コミュニケーションとはなにか. 日本認知症ケア学会誌. 2016, Vol.14, No.2, p.433-438.
- 15) 川島みどり監修. 老年看護学改訂版 2015 看護の科学社, 東京, p.313 ISBN978-4-87804-090-0.
- 16) 横山ハツミ. 認知症高齢者のアクティビティケアにおける看護学生の学びと評価. インターナショナル Nursing Care Research. 2005, p.39-48.
- 17) 岩永和代. 周産期看護学実習における看護学生の学び. 日本看護学会論文集, 看護教育29回. 2005, No.35, p.72-74.

資料1 アクティビティケア計画用紙

アクティビティケア計画用紙

年 月 日
 学 生 () 人
 高 齢 者 () 人
 スタッフ () 人

タ イ ト ル			
内 容			
目 的 (意 図 する もの)			
計 画 立 案 上 の 理 由 ・ 重 要 点 (……という発言があったからなど)			
学 生 が 用 意 する 物			
ス タ ッ フ が 用 意 する 物			
配 置 図			
時 間 開 始 時 分	高 齢 者 さ ん の 動 き	ス タ ッ フ さ ん の 動 き	学 生 の 動 き
終 了 時 分			
ア ク テ ィ ビ テ ィ ケ ア 時 の 注 意 事 項			

資料2 アクティビティケア評価用紙

アクティビティケア評価用紙

施設名 () タイトル ()
 年 月 日 () G 学生 () 人、氏名 ()

1. 認知症高齢者の状態 参加者 () 人

	Aさん								
年 齢									
性 別									
要 介 護 度									
障害老人自立度									
認知症生活自立度 (認知症レベル)									
車 椅 子									
麻 痺 の 有 無									
言 語 機 能 障 害									
聴 力 障 害									
参 加 様 子 ※									

※ 1. 没頭している 2. 表面的な参加 3. 他人を眺め、道具をとらない 4. 回避・参加せず

2. アクティビティケア評価表

1. 計画内容の変更(あり、なし) 実施した内容	理 由
2. 全体として認知症高齢者の能力にプログラムが合っていたか、理解していたか 5大変よい 4よい 3普通 2やや合わない 1合わない	理由、改善点など
3. 安全であったか 5大変安全 4安全 3普通 2やや危険 1危険	理由、改善点など
4. プログラムで目的を達成できたか 5大変できた 4できた 3普通 2ややできない 1できない	理由、改善点など
5. 全体として認知症高齢者は楽しんでいたか 5大変よい 4よい 3普通 2ややつまらない 1つまらない	理由、改善点など
6. 全体として学生は楽しみながらできたか 5大変よい 4よい 3普通 2ややつまらない 1つまらない	理由、心がけたこと、改善点など
7. 当日の認知症高齢者の様子を記述(介入前の認知症高齢者の発語など)	
8. 認知症高齢者のアクティビティケア中での様子(学生の援助内容や、認知症高齢者のアクティビティ中の発語なども含む)	
9. 認知症高齢者のアクティビティケア後の様子	
10. 認知症高齢者に対して行うアクティビティケアに困難に感じていること、また必要なことは何であるか	
11. 認知症高齢者に対してアクティビティケアを行い、学生が認識する効果	
12. アクティビティケア後の感想など	